

ボストン大学公衆衛生大学院留学報告書

2017-2018年度グローバル補助金奨学生 舟越 優



- 留学先 ポストン大学公衆衛生大学院修士課程
- スポンサークラブ
東京立川こぶしロータリークラブ
- ホストクラブ Salem Rotary Club

1. 履修内容, 学校生活の報告

期末試験も無事終了し、久しぶりに一息つき、落ち着いた気持ちで日々を過ごしています。学びの面でも出会いの面でも大変充実した4ヶ月でしたが、常に一定の緊張状態にあったことにも気が付きました。

秋学期には4つの必修科目を履修しました。日米双方の法体系の違いや社会制度への知識不足と、求められる文章構成への要求の高さから最も苦勞していたPH719では残念ながらB+という成績でしたが、残りの3科目では全て最高評価のAを取得することができました。授業やシステム、課題の多さなど苦勞した点も多かったのですが、こつこつと時間をかけて努力することで、言語面でのハードルをゆっくりとではあっても乗り越えていけるという経験が得られたのは重要な学びとなりました。このように勉学に集中できるのも皆様からのご支援あつてのことであり、改めて感謝申し上げます。

12月中旬に、知人にお声がけいただき、人種差別と健康についてニューヨークで日本人の小児科医が開催している勉強会でお



PH720でのポスター発表のチームと。スウェーデンでの出生率と社会経済的地位について発表しA評価をもらうことができました。

話す機会を得ました。人種差別は米国のような移民国家では医療に限らずありとあらゆる社会科学で主要なテーマです。そのため秋学期の4つの履修科目でも軽重の差はあれすべての授業で繰り返し取り上げられました。人種差別と健康はあまりに広いテーマであり、全体像をここで語ることは難しいため、今回は Implicit Bias(潜在的バイアス)という概念に絞ってご紹介いたします。

米国では2000年頃から、特に鎮痛薬の使用において、白人と有色人種（特にアフリカ系アメリカ人）との間で受けている治療に明らかな差があり問題となりました。アフリカ系アメリカ人がより少ない量や種類の鎮痛薬を処方されており、不十分な治療を受けている可能性が示唆されたのです。この傾向は特定の人種や医療者に限定して見られるわけではなく、人種差別に対して否定的な考えをもつ医療者の診療でもみられることが分かり、原因と対策が大きな課題となりました。

種々のメカニズムが想定されていますが、ひとつ有力な候補とされているのが、医療者が持つImplicit bias（潜在的バイアス）です。潜在的バイアスは人種や性別、年齢、体型などに対して起こるバイアスで、理論的には意識的な認知プロセスを経由せず、自覚のないままに差別的な言動を通じて他者に危害を加えるとされます。

例えば、ある研究ではIATと呼ばれる潜在的バイアスの強さを測定する試験（最も一般的に行われていますが、結果に一貫性が乏しいことや、試験の結果と現実の行動との関連を疑問視する批判もあります）を行ったところ、研究に参加した医師の集団全体に白人への好ましい感情とアフリカ系アメリカ人は治療遵守率が低いというステレオタイプを持つ傾向が観察され、さらに医師の白人への好ましい感情の強さと心筋梗塞に対する血栓溶解療法の治療選択における人種間の違いは有意に相関していました。ところが、アンケート調査では医師の多くは自身がステレオタイプを持っていることを否定しており、自己認識と潜在的バイアスおよび医療行動とに乖離があることが示唆されました。また別の研究では白人に対して好意的な傾向を持つ小児科医ほどアフリカ系アメリカ人への鎮痛薬の処方量が減少する傾向がみられたという研究もあります。つまり、



Boston Celtics観戦。
平日でしたがスタジアムはほぼ満員で熱気にあふれていました。

医師が人種差別的傾向を自覚しているかどうかにかかわらず、無意識に持っている人種差別的傾向が患者の治療方針を誰も気が付かないうちに変えてしまっている可能性があるのです。

また、潜在的バイアスは医療者だけが持つものではありません。日本を含む各国で、幅広い年齢で、人種だけでなく年齢や体型に対する潜在的バイアスの存在が繰り返し示されており、普遍的な現象であると考えられます。ではなぜこのようなバイアスが私たちに生じてしまうのでしょうか。潜在的バイアスは人びとが知らず知らずのうちにさらされている文化（例えば映画や小説で有色人種は白人に比して、否定的なイメージの単語とより多く関連して登場することが知られています）や社会的慣習を通して形成、強化されています。したがって個人の努力だけでこういった背景を変えることは難しく、バイアスの形成を完全に防ぐことは少なくとも現状では難しいと言わざるを得ません。まずは自身がどのような潜在的バイアスを持ちうるかを認識することが対策の端緒となるでしょう。日本は諸外国と比較しても、歴史的に人種的多様性が低い社会とされます。しかし近年では外国人旅行者、外国人居住者とも増加傾向です。法務省が平成29年はじめに公表した在留外国人を対象とした調査でも、（調査方法や回答率、質問内容などをふまえた解釈が必要ですが）住宅への入居や職場などで多くの方が差別を受けた経験があると回答しています¹。



日本社会として他国から日本へとやってくる人びと、日本で生まれる国籍の異なる人びとに対してどのように接していき、いかに社会を形作っていくか、今後ますます私たち一人ひとりの考え方、態度が問われていくと考えます。潜在的バイアスについてはこちらのBBCによる記事の日本語版が大変わかりやすく書かれていますので、ご興味がおありの方はご覧ください²。

日常生活では、12月はNBAを観戦する機会に恵まれました。Boston Celticsは現在非常に好調でイースタン・カンファレンス、アトランティック・ディビジョンの首位を走っていたこともあってか試合も大変盛り上がり、逆転勝ちをおさめました。スタジアムの雰囲気やコート付近の近さなど本場のバスケットを堪能しました。バスケットに限らず、音楽や美術にも言えるのですが、素晴らしい作品やプレーをみることは単なる楽しみ以上の意味が私にとってはあります。作品やプレーの実現を可能にした、才能の上にさらに積み重なった膨大な努力を感じ、自らを省みる機会だと思っています。私もすぐには結果が出ないことも多いですが、倦まず弛まず努力を続けたい

¹ <http://www.moj.go.jp/content/001226182.pdf>

² <http://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-40401723>

と感じながら華麗なボールさばきに酔いしれた一夜となりました。今後はメジャーリーグも観戦にもぜひ出かけてみたいです。

2. ロータリアンとの関わりについて

ホストクラブの方とも日程調整を行っているのですが、例会が開かれている火曜日が毎週授業であり、残念ながら年内は訪問が実現できませんでした。春学期でのセーラムへの訪問を調整中です。

3. 重点分野に関して感じたこと、履修内容との接点

年末にかけて、日本からの小児虐待に関する心の痛むニュースを複数目にしました。米国でもそうですが、どうしてもこのような際に保護者を中心とした個人の来歴や、児童相談所など諸関係機関の対応といった直接的な部分にマス・メディアの関心は集まります。しかしこの4ヶ月学んだことで、養育能力が不十分な保護者に対する支援や指導に偏った対策は不十分であるとの思いを強くしました。もちろん一人ひとり、一家庭一家庭を対象とした対策は重要です。しかし、ひとつの取り返しのつかない悲しい事件の背後には幸いにも事件には至らずとも、経済的な理由や健康上の問題、地域社会からの孤立などさまざまな要因で苦しんでいるこどもと保護者が多く存在します。そしてそれは家族のあり方と地域社会の変容、雇用形態の変化、そしてなにより若年世代への支援の不足といったよりマクロな社会経済的要因を抜きにしては、問題の構造を考えることも必要な支援を行うことも決してできません。簡単に良い答えが見つかるような課題ではありませんが、社会全体にとって必要なこと、自分自身が関わっていけること、どちらも考え続けていく努力を続けてまいります。

ボストンはすっかり寒くなり、連日の氷点下にもすっかり慣れてきました。学んだ内容を復習しつつ、年末年始はのんびりすることも忘れず、1月からの春学期に備えたいと思います。皆様も良い新年をお迎えください。それでは次回は2月末にご報告を差し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしく願いいたします。